

題名 関係流動性が社会不安に与える影響～マルチメソッドアプローチを用いて～

氏名 石塚諒一

指導教官 結城雅樹

近年、人々が経験しやすい社会不安のタイプに文化差があるとの報告がなされている (Dinnel et al., 2002; Norasakkunkit et al., 2012)。東アジア人は、周囲の人々との関係に注目した社会不安 (例、周囲の人々に迷惑をかけていないかなど、以下インタラクション不安) が高く、一方で北米では自身に注目した社会不安 (例、自分が上手にスピーチできるかなど、以下、パフォーマンス不安) が高い。本研究では、これら文化差の原因は社会生態学的要因である関係流動性の差異による、との仮説を検証した。

関係流動性とは、ある社会や社会状況に存在する対人関係の選択肢の多寡である (Yuki et al., 2007)。低関係流動性社会や社会状況では、新たな関係を構築することや、既存の関係から離脱する機会が少ない。そのため、一度既存の関係から排斥されると代替の関係を見つけることが困難である。ゆえに人々は既存の関係からの排斥を回避するように動機付けられる。よって人々は関係からの排斥のサインに敏感になるため、高いインタラクション不安を持つだろう。一方、高関係流動性社会や社会状況では対人関係における自由度が高く、関係の組み替え機会が多いため、より望ましい関係形成に挑戦できる機会が多い。しかし、より良い関係形成に成功するためには、自身も良い相手として認められなくてはならない。ゆえに、人々は自己の能力が十全かどうか気に配るため、高いパフォーマンス不安を持つだろう。

以上の仮説を検証するために、関係流動性の異なる社会 (研究1: 日加国際比較研究) および社会状況を比較する調査研究 (研究2: 国内縦断研究) と、プライミング法を用いて参加者の関係流動性認知を操作する実験 (研究3: 実験研究) を行った。

その結果、研究1では予測通り、低関係流動性社会 (日本) では高関係流動社会 (カナダ) と比べてインタラクション不安が高いことが示された。一方、パフォーマンス不安についての結果は予測と一貫しなかった。大学生を対象として関係流動性の異なる状況を比較した研究2では、どちらの不安にも差異が示されなかった。関係流動性認知をプライミング法により操作した研究3では、インタラクション不安は予測通りのパターンであったものの、パフォーマンス不安の条件差は示されなかった。

今後の研究では、交絡していると考えられる変数を排除・統制する、一般の人々に対して調査を行う、などを行うことにより、本仮説をより多角的に検証していくことが求められる。